

る。しかし当地域も若手労働力が他産業に流出し毎年参加者が減少し、その効果もうすれて行くようである。同時にこれは全漁村が担う今後の問題でもあるようだ。

二 むすび

今回の先進地視察は底延縄を主体とした漁具漁法、省力機器の導入を目的としたもので底延縄漁業の先進地である山口県萩市を選定し、漁港としての諸施設並びに規模等つぶさに見聞し知見を得た。同市は日本海側に面し恵まれた地勢のなかに漁港としての機能が設備され必然的に大型化へと発展したと思われる。漁船も殆んど近代装備を誇り、本県のような小型沿岸漁業とは格差があり、およそ10年以上のひらきがあった。

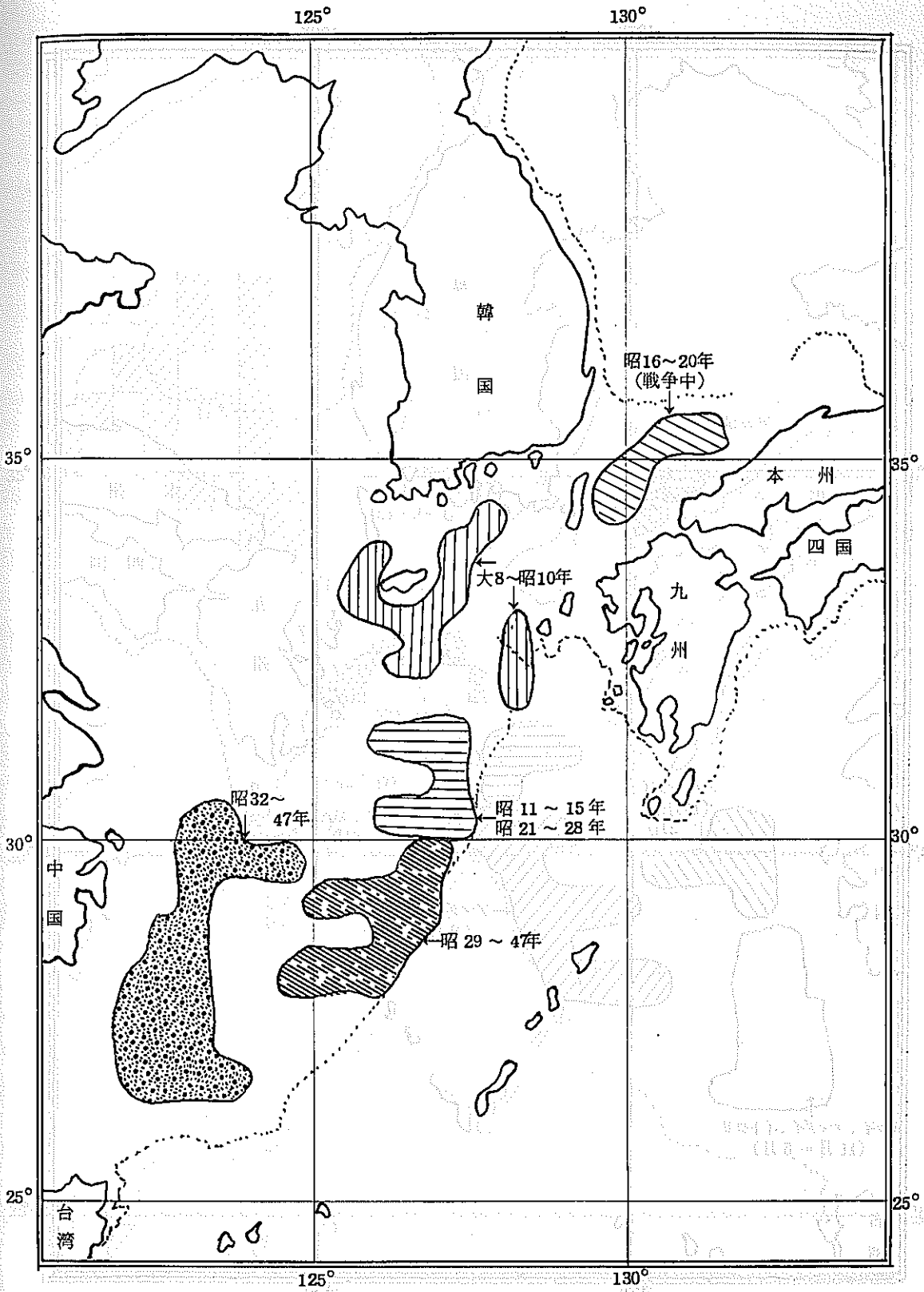
特に参加グループの糸満漁協研修員には、各自が肌ふれ自己の経験にプラスされた漁具漁法、省力化等の今後の改善が期待される。

特に感じたことを列挙すると

1. 漁協傘下の組合員の結びつきが強く操業中好漁場に当たると無線電話による暗号で同所属船に連絡し合い、民主的な安全操業が行なわれている。
2. 漁船の大型化が進み一方では乱獲による資源の枯渇で漁業経営に支障をきたしつつあるとの事で延縄協議会で自主規制がおかれている。
3. 沿岸漁場の荒廃による重要資源の枯渇など、きびしい経済環境下でありながら漁場造成を主体とした、大型並型魚礁の設置、投石事業等及び人工的干潟を造成し、クルマエビ種苗生産放流事業等が行なわれ、普及員の指導のもとで大規模な沿岸漁場の造成が強力に実施されていることは羨望の限りである。
4. 山口県水産課、萩水産事務所の上層部はほとんど普及員を経験しており、全般事情に通であることは他県に例がないことであろう。

今後の本県の底延縄漁業のありかた

山口県萩市の底延縄漁業は沖縄南西60海里から台湾近海まで進出し、漁場はしだいに南下する傾向にあり、将来本県の漁港が整備されると、集団で本県を基地として、沿近海操業が行なわれることが推察される。そこで他県の漁船に対処するためには、漁業者相互の自己本位な考えをもつ古い因習を打破し、自主的協業化へめざめ漁業経営の改善集団操業、省力機器の導入改善、科学装備（魚群探知器、ロラン、無線電話）の設置、漁場開拓等への関心を高めることであろう。そのことから10～19トン型に大型化し、他県に最適する体制を早急に樹立する必要がある。即ち漁民と研究、行政機関の三者が一体となった施策が必要であることを再認識した。



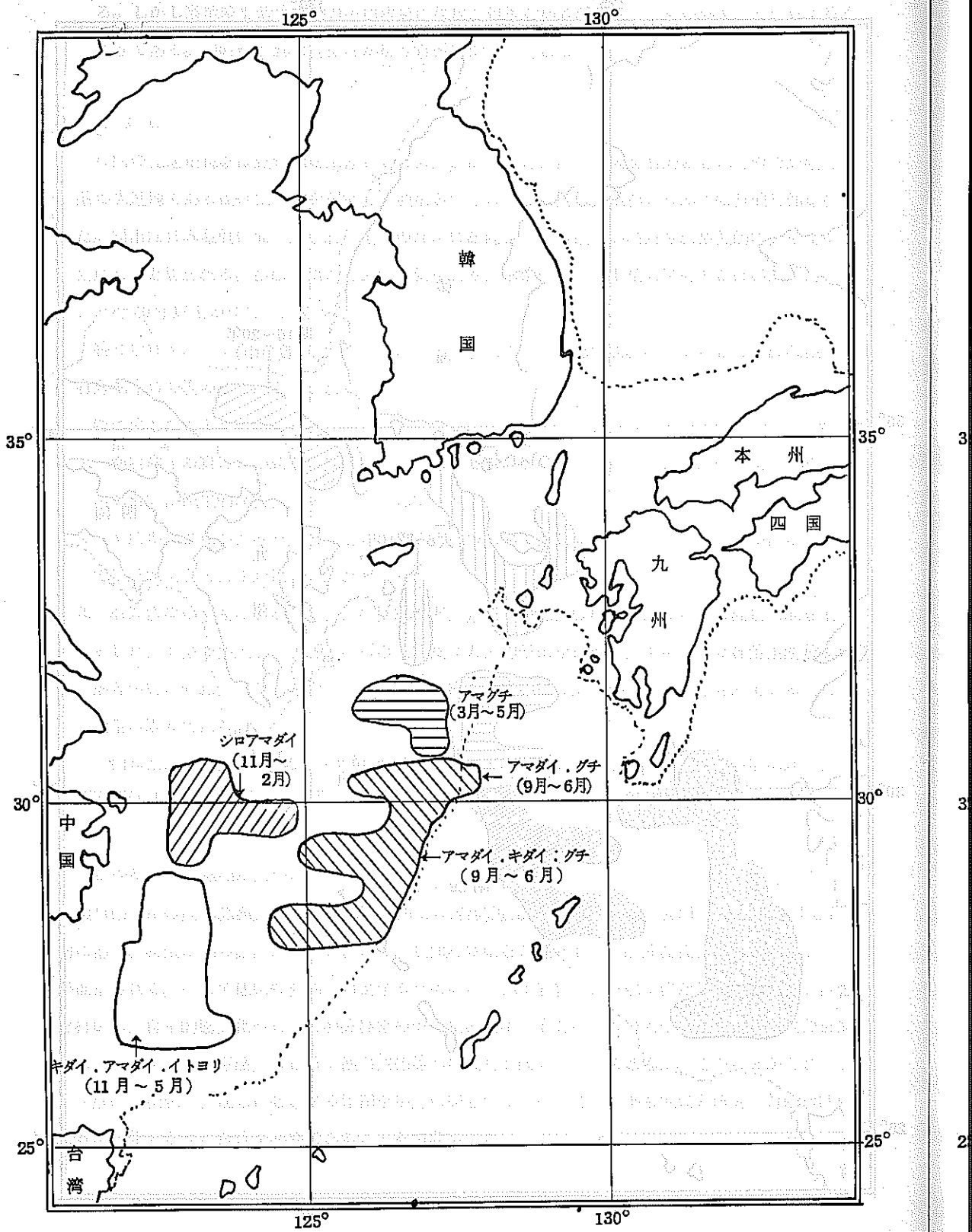


図-6. アマダイ・キダイ漁場の季節変化

125°

130°

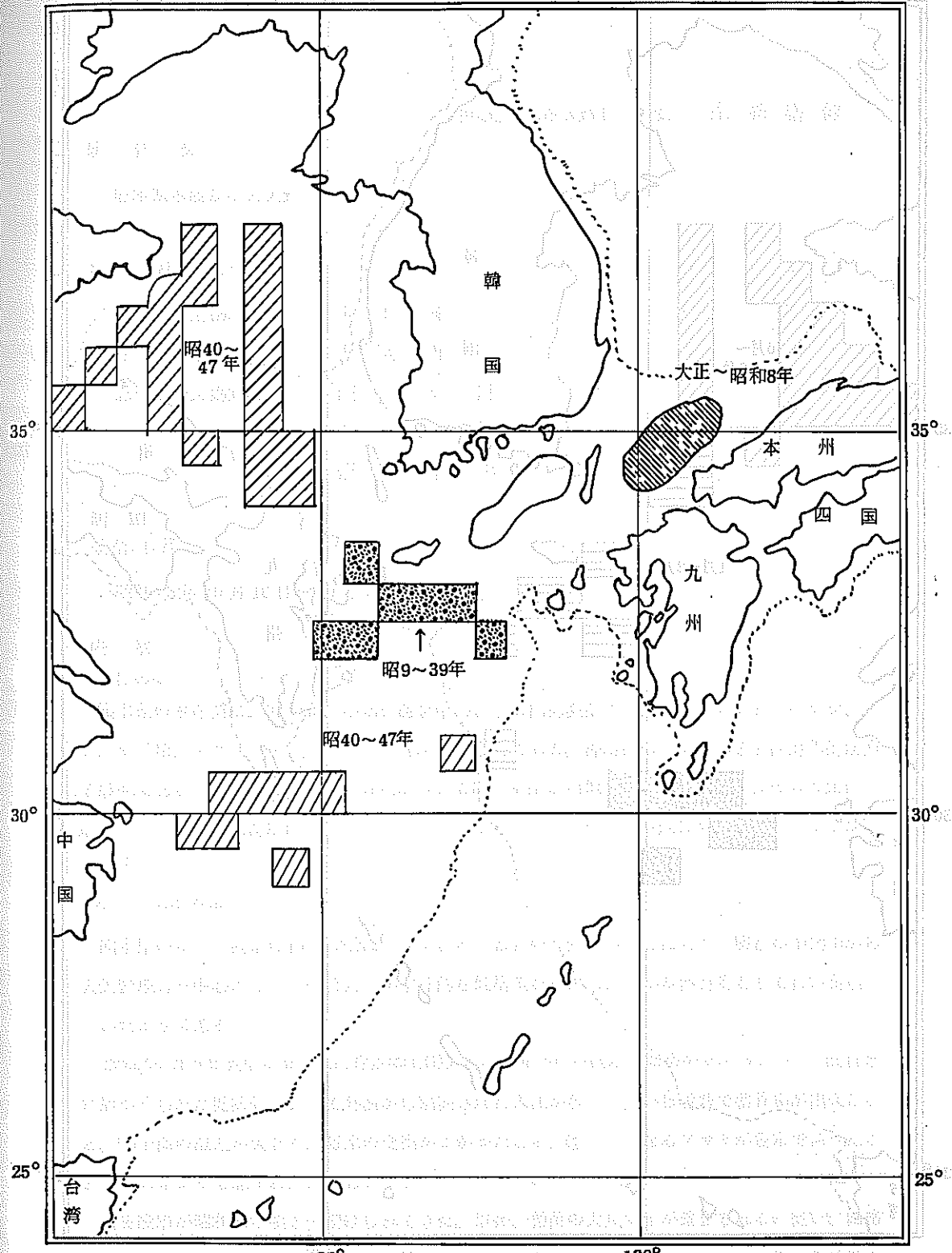
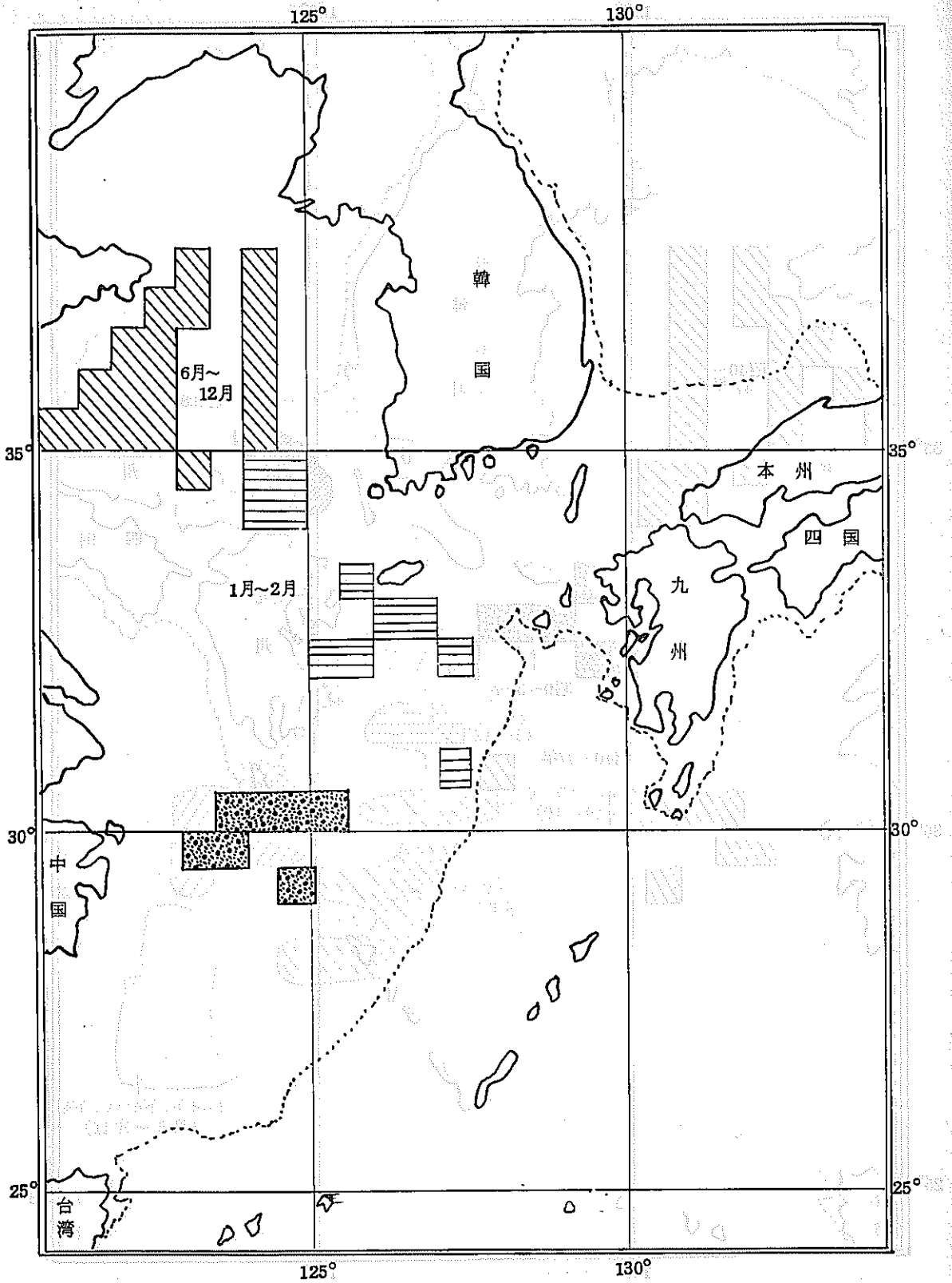


図-7. フグ漁場の推移



図一四 冬季の風向・風速の平均値

冬季の風向・風速の平均値